

ADULT ONLY



南蛮の玩具屋



前書き

こんにちは、アイモです。まずはこの本を手にとっていただきありがとうございます。

初のソウリン本を製作できたのでひとまずは満足……んなわけないです！！

反省する部分がただただ多く読んでいただく方々に先に謝罪させていただきます。申し訳ございません。

まだまだへっほこな部分の多い作品ですが、楽しんでいただけたらと思います。

それでは！

豊後

南蛮商人の店

こんにちはは〜！

おやおやソウリン様
いらっしやいませ！

本当ですか！

本日は新刊が多数
入荷しておりますぞ

その本棚の一番上が
新刊となっております



あのう・・・
取っていただいても・・・

か・・・かしこまりました



ソウリン



今日は土佐国まで
出かけています

そうですか♡

今日はドウセツ様は
一緒じゃないのですか？

は・・・はい

かあっ...

はい
ソウリン様

あ・・・
ありがとうございます

ソウリン様！

はい？

少しよろしいですか？

……？

実はこの奥に本日仕入れたばかりの新商品があります……

よかったらご覧になれますか？

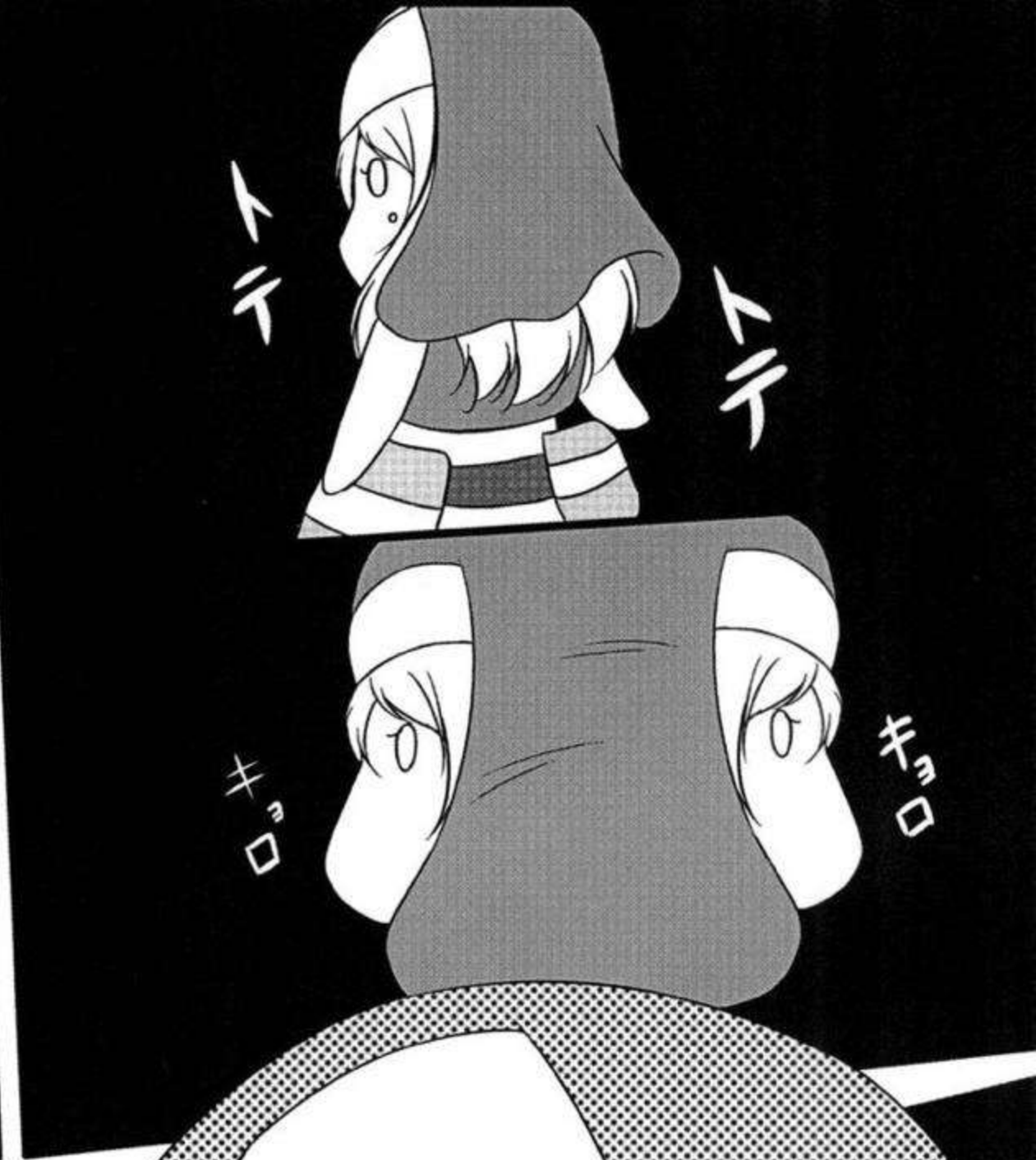
本当ですか！

是非！
お願いします！

さあ……
こちらです……

しんしーひん！

しんしーひん！



あれ？
私は……？

さっきまでお店で買い物……
え？声……？



パキッ……



ほっほっほ……
お気づきになりましたか……

なかなかそそる
格好ですぞ

さっきの商人さん!?



では新商品の「説明を
させていただきますしよう

ソウリン様が口にしていますは
ポールギヤグと言いまして…

フー…
フー…

装着者の口を塞ぎつつ
常に垂れてしまうよだれ
による羞恥心を与える代物です

下着のほうはギリシタンである
ソウリン様でも楽しめるようアナルを
いつでもいじれるものを「用意いたしました

そしてこちらの拘束具
ガッチリ！そして誰でも簡単に
付けることができるすばらしいものです

そして「こちら目玉の
新商品のローターです！

職人が繰り返し作り
なおした至高の一品です

たろっぷり味わってくださいね々

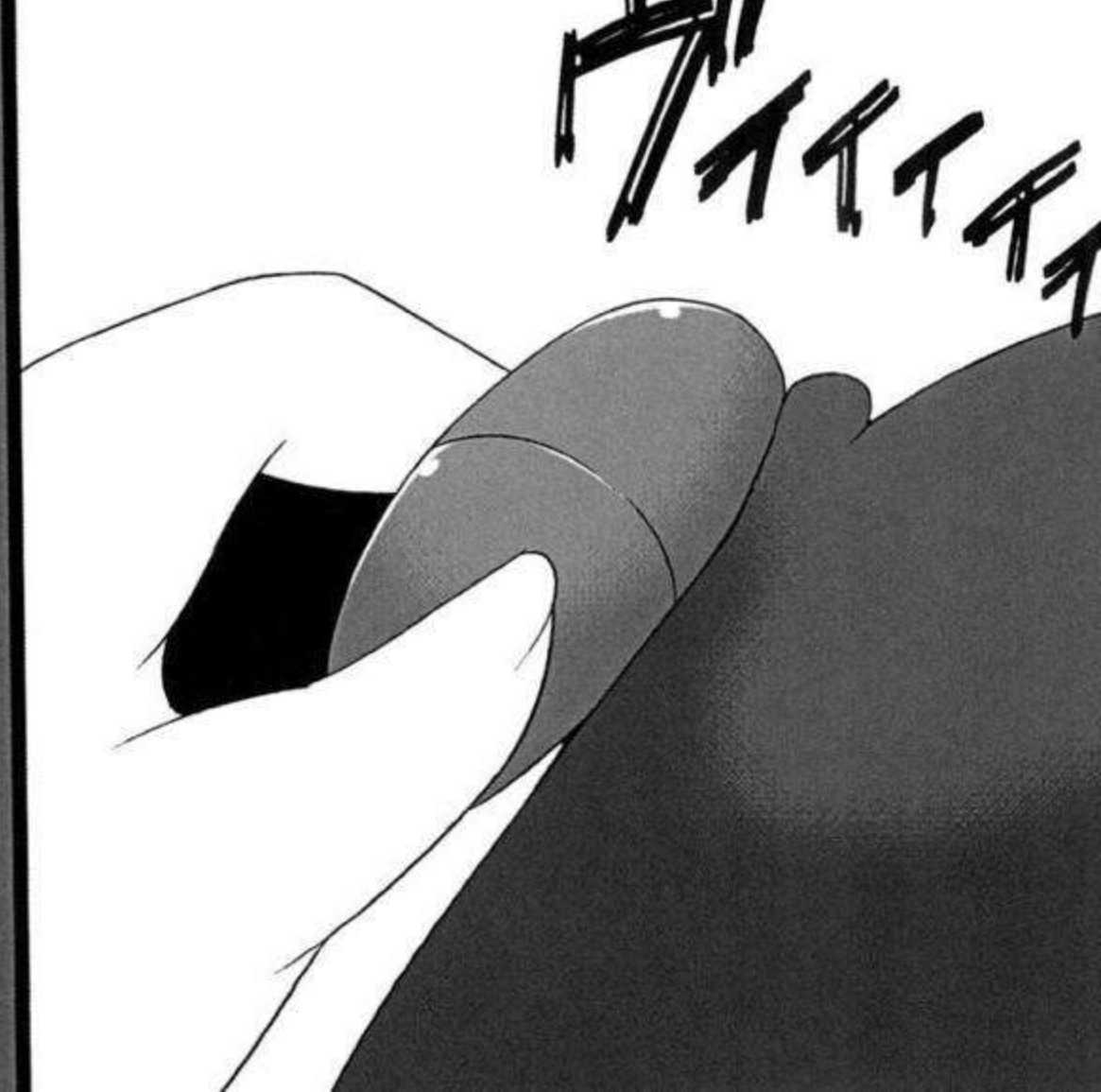
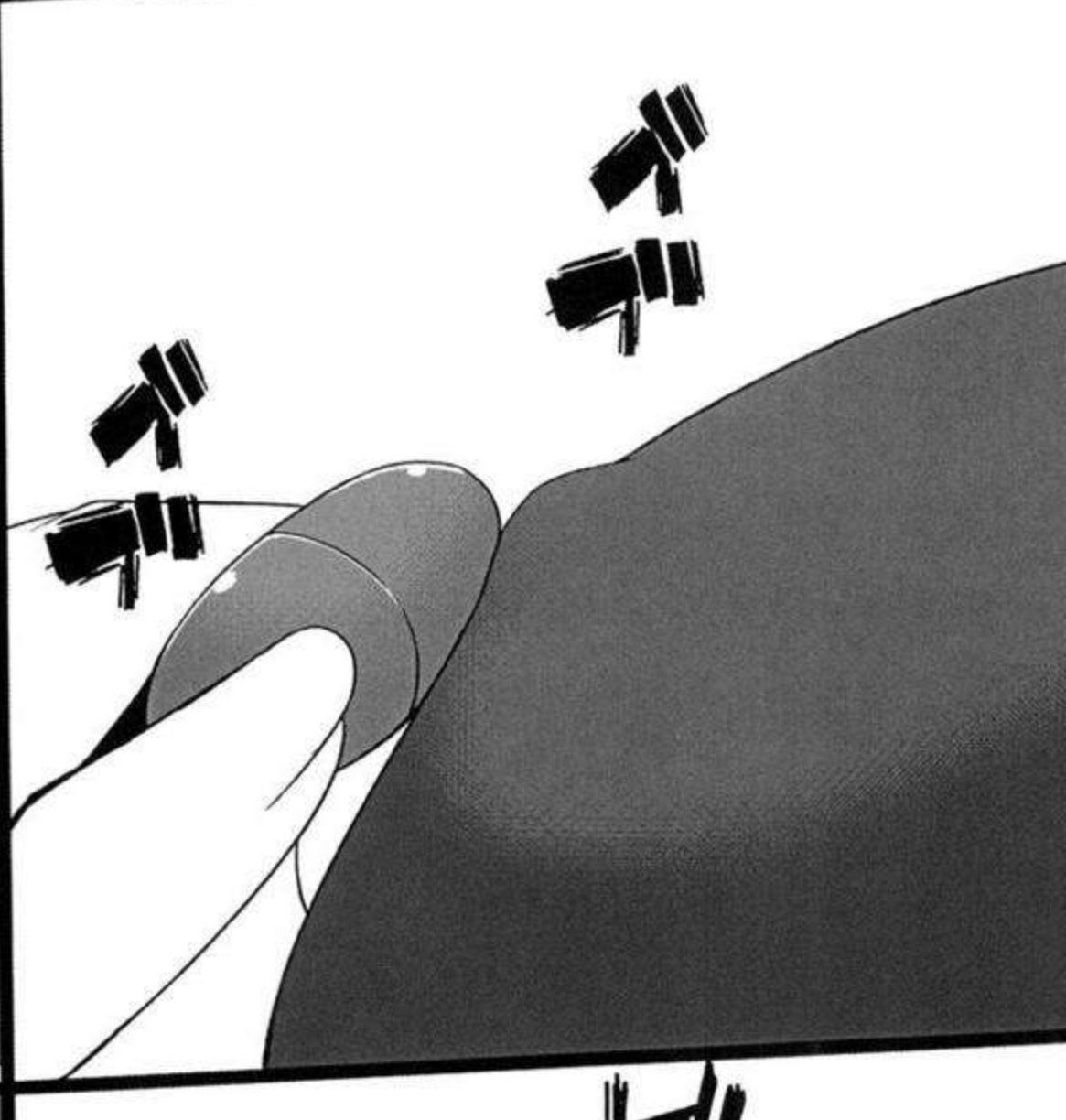
グ
オ
グ
グ



んあッ♡

んあッ♡

んあッ♡



そろそろ
ソウリン様も我慢の
限界でしょうか？

何せこの部屋には
催淫効果のある
御香を焚いておりますので

もうイキたくて
しようがないでしょう？

ふ……ふひあ！

ふ……ふ……ふ……

ほっほっほ……
ささ……遠慮せずイッてください

や...だめ...

ニヤッ

と...と...と...

ニヤッ

ニヤッ

ニヤッ

いかがでしょう？
とても気持ちがいいでしょう？

ニヤッ

ニヤッ





どうでした？
ソウリン様？

はあはあ・・・
も・・・もうゆるして・・・

んん？
まだまだ新商品は
いっぱいありますぞ？

遠慮せず
試用していただくさい

お次はこんなものは
いかがでしょうか？

ひっ！

これも振動する
道具なんですがね…

威力が強すぎるため
人によっては失神してしまう
場合もございます

サッ

サッ

や…やめて！

さっきイッたばかり
だから…だめ…

ほっほっほ
だから良いん
じゃないですか

ブッ
ブッ

ブッ
ブッ

それっ！

クッ



では・・・
これはいかがでしょうか？

ほっほっほ・・・
そんなに良いですか



い・・・いや!!
もう止めて!!

イッてる!!
もうイッってますから!!

う...あ

ああもう
X...H...
あ



ほっほっほ...

盛大にお漏らしされて...

まだたろつぷり

新商品をあじわって

いただきますからね

その前に

濡れた衣服を

着替えさせていた

だきましよう

うらむ

実にいい眺めですぞ♪

ソウリン様 ♡

お…お願い…

ずい

もう…
やめてください…

お

ほっほっほ

そく遠慮なさらなくて
結構ですぞ！

はあ

日ごろの感謝をこめて

ソウリン様に試用していただきたいのです

クリシタンであるソウリン様のために…

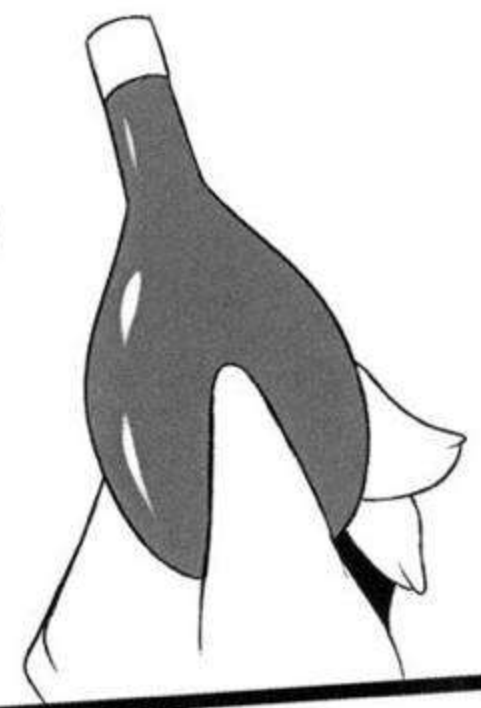
アナルで楽しめる商品を

多数取り寄せてみました！

ではまず

お怪我をされないように……

フッ



パキッ

ちゅーん

んあッ



念には念を入れて……

さあもう一本

じゅるる……



んあッ

さき

ソウリン様いつでも
出してくれませんか！

い……いや……！

お……お願い……トイレに……

ぷんぷん……

トイレに
行かせてください！

うむ……

すぐにはだしませんか……

では……

ひっ！

すみませんねえ……

私もずっとこの媚薬の御香を
嗅ぎ続けていますので……
もう我慢の限界なのです

や……

く……く……

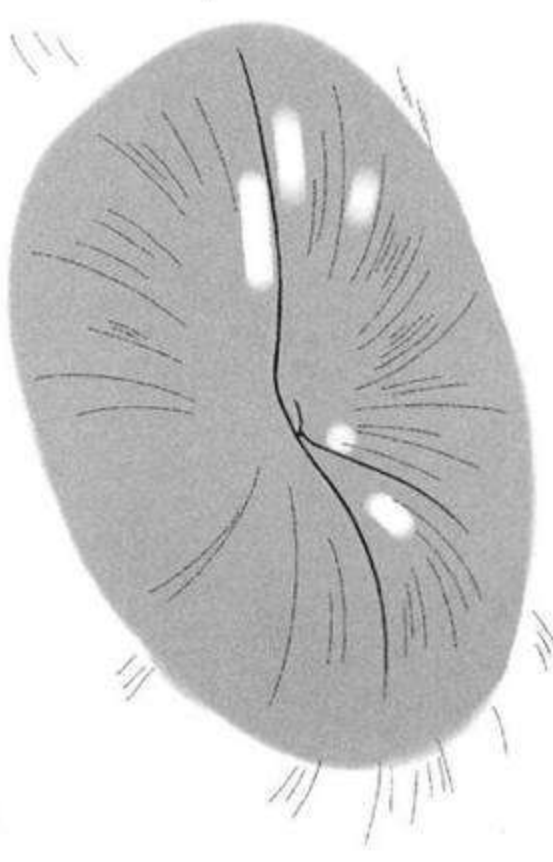
ははは！

まじかー

ほおこう
これは思った以上に……
ソウリン様はすばらしい
肉奴隷の素質があるようですね

く……くるし……

あ……や……や……
でぢぢぢ……でぢぢぢ……



ど





おやおや
そんなにごぼしてしまつて……



立派な性奴隷には
なれませんかよ

いけまんせよ
ちゃんと全部飲まないと

さ……さつきから
なんのつもりです！

それに性奴隷つて

どういうことですか！

なにを言っているか理解に苦しみます！



それなら
教えてやろう……

くつく……

このまま商人のまま
犯しつくしてやろうと思つておつたが……

この暑苦しい姿にもいい
加減飽きてきた……



な……！



そ……その紋章は！

フフ・・・
商人に成済まし

奴隷として売ろう
と思っておったが・・・

お・・・
オマエは!

少々気が変わった・・・

オヌシはこのまま
童の僕にしてくれよう

カ
シ
ン
!

さあ無限の闇に
包まれるがよい!

その後・・・
私はビーズのような玩具で
お尻を弄ばれ・・・



アッ

アッ

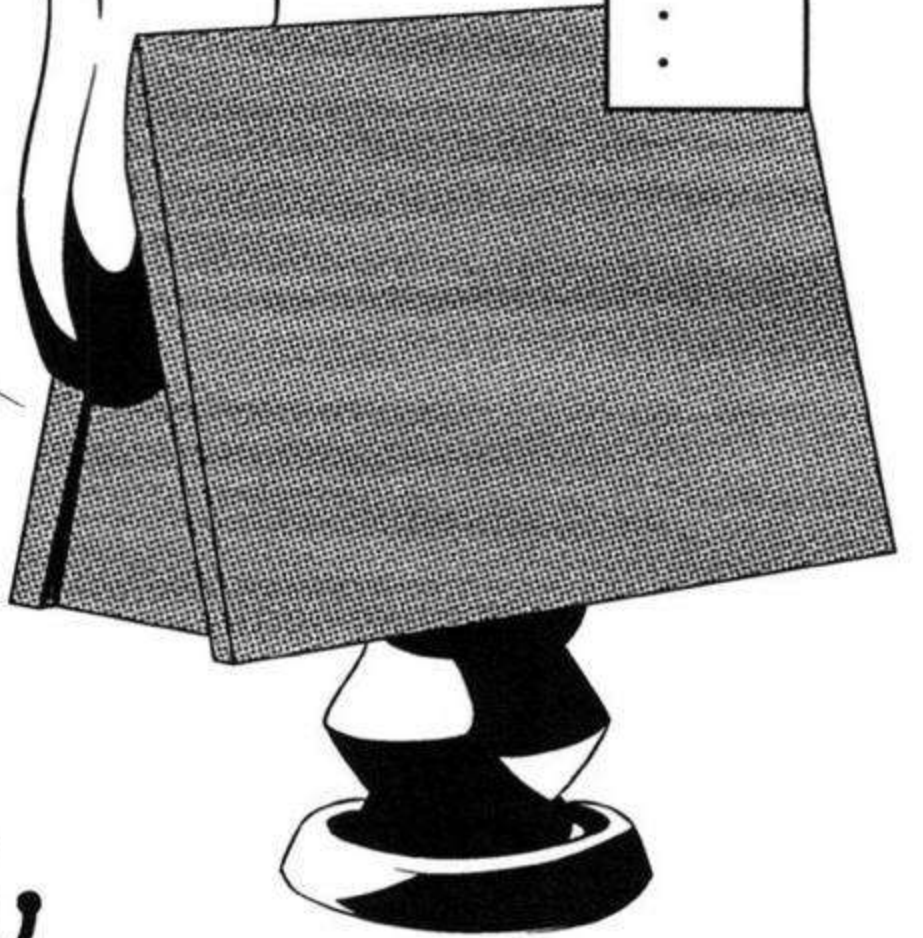
アッ

アッ

アッ

馬のような
乗り物にのせられ……

身体に大量の
媚薬を筆で塗られ……



や……だめ……
もれちゃ……う……

お、お

再び浣腸をされた状態で……

ぬ、ちゅららら

お尻が真っ赤にはれ上がるまで叩かれ

最後には我慢できずに

失禁・・・そして・・・

脱糞までしてしまいました・・・



フッフ...

ずいぶんと盛大に
糞尿をぶちまけたのう

くたあ...

んんんんん

そろそろ
童も楽しませて
もらおうか

んんんんん

お主のその広がりきつた

しばあ...

尻穴にぶちこんでやろう

どうじや？

呪術を使えば

このようなこともできる

んんんんん

ひ...やらあ...
そんなの挿れられたやあ...

んんんんん

こわれひやう...



ほおう
なかなかの締りじやのう

ぎゅん



あーん

あーん

ほれ！
もつと童を満足させてみよ

しゅぽん

ぬほ

そうじゃ!

もつとぎゅつとしめつけい!

うむ...
なかなかよいぞ!

ど

ぬほ

は...
はひ!

びん

ど
びん♡

びん

くく...

ほれ頑張った褒美に

童の精子をたっぷり

そそぎこんでやろう!

ぽ♡♡♡♡

肉奴隷へ調教した後は

南蛮商人にでも引き渡そうと思っておったが...

あ.....ううう.....

あひ.....
でてりゅ.....

はあ...
はあ...

気が変わったわ!
このまま童の僕にしてくれよう
くつくつくつく.....

んん

んん

んん

んん





「落日」



「え、本当ですか？」

廊下を歩いているとソウリンの声が聞こえ、部屋を覗くドウセツ。

ソウリンはエンジニアと話をしているようで「困りましたね」と首をかしげながら何かを考えていた。

「どうかなさったのですか？」

ドウセツが声をかけるとソウリンがドウセツに視線を移す。

「実は南蛮から届く予定だったドウセツの定期メンテナンスの機械が間違えて土佐国へ届いてしまったらしくて」

ドウセツは首をかしげる。

「ならば取りに行けばいいのでは？」

「明日は行きつけのお店の商品の入荷日なんですよ」

「ああ、なるほど」

ため息をつくドウセツ。

ソウリンの行きつけの店は南蛮の品を取り扱っているのだが、掘り出し物はすぐに売れてしまう。

そのためソウリンは商品の入荷日に必ず店へ行くようにしているのだ。

「ドウセツ、一人で行って取ってくることで出来ますか？」

「出来ますが、ソウリン様がまた無駄遣いしてしまわないか不安でございます」

「し、しないから！ ね、ドウセツ、お願い！」

またため息を吐くドウセツ。

こうなった以上、言っても聞かないであろうし、無理に言うことを聞かせれば、後でねちねちと文句を言われかねない。

「わかりました、無駄遣いをしないと云うのならいいですよ」

「ほんと！？ ドウセツ、ありがとう！」

この選択肢が二人の人生を大きく変えることになることになるなんて、まだ二人は気づいていなかった。

このとき、もしもドウセツが断っていれば、もしもソウリンが南蛮の品をあきらめていれば……。

土佐国の南蛮関連の店。

ここには土佐唯一の南蛮エンジニアが住んでいる。

彼女はモトチカの知り合いでドウセツとも何度かあったことがある。

「申し訳ありません、私が送り返すべきだったんですが」

「いえ、問題はございません。元々は南蛮の商人の方の手違いでございます」

そう言って荷物を受け取るドウセツ。

「そうだ、お詫びと言っては何ですが、メンテナンスをさせていただきませんか？」

エンジニアとは面識があったため、ドウセツは「では、お言葉に甘えて」と軽く承諾をしてしまう。

このとき、それを断ってさえいければ結果は変わっただろう。

「この台の上で服を脱いで横になって待っていてください」

「御意」

ドウセツは上半身の服を脱ぎ、それをたたむと言われたとおり横になる。自分の城でもいつもすることだったため何の抵抗もなかった。

（さて、メンテナンス用の道具は……）

エンジニアはドウセツのメンテナンスのための道具を取り出そうと部屋を出る。そして……。

「っ！？」

突然後頭部に走る衝撃。

一瞬で世界が真っ暗になり、そのまま彼女は気を失う。

「所詮、一般人ってことね」

「姉上、見張りはお任せください」

「ええ、頼むわね、紫苑」

後ろに立っていたのはカシンの家臣である鬼灯と紫苑。

鬼灯はカシンから預かった呪術の札をエンジニアに向け、貼り付ける。すると、鬼灯の姿がエンジニアと瓜二つに変わる。

「さて、楽しいメンテナンスの始まりね」

「さて、じゃあ早速メンテナンスをはじめるわね」

ドウセツはその言葉にうなづく。

そしてエンジニアに化けた鬼灯に無防備な姿をさらし続ける。

「……まずは」

にやりと笑う鬼灯。

ドウセツをうつ伏せに寝かせると背中にあるメンテナンス用の扉を開く。

そして、ドウセツの両手足へのエネルギー供給を行う回路の電源を……。

カチツ

「え？」

切った。

「な、なぜ」

「なぜって、抵抗をされないようにです」

言いながら、鬼灯はドウセツの背中にある挿入口にメモリーカードのようなパーツを組み込む。

その瞬間、ドウセツの体が大きく揺れる。

「ひやつ!？」

普段の彼女からは想像できないような艶めいた悲鳴。

「どう? 性行為を行うためのプログラムをインストールされた気分は」

「あ、あなた、は……エンジニア、では……」

「あらあら、今更気づいたの。でももう遅いわ。あなたもあなたの主も私の主にとって邪魔な存在なの。特にあなたの邪悪な気を感じする能力はね」

言いながらドウセツの体をひっくり返し、仰向けの状態にする。

「ある、じ? ……ま、まさか、ソウリン様にも!？」

「今頃私の主と楽しんでるんじゃないかしら?」

それを聞いたドウセツの顔色が変わる。

「っ!!! すぐに、スイッチを入れなさい!!!」

「あら、いいの?」

(ソウリン様、ソウリン様をお守りしなければ!!!)

鬼灯は笑いながら手元にあるスイッチを押す。

その瞬間、ドウセツの体は跳ね上がる。

「ひあつ!？」

「どう? 急に感度が跳ね上がる気分は」

「な、なにを……」

「さっきインストールしたプログラムのひとつで、これを押すだけで軽い絶頂を迎えることが出来るの。いいでしょ?」

ドウセツは顔を赤くしてそっぽを向く。

しかし、まだ脱いでいなかった短パンには言い訳が出来ないほどのしみが広がっており、鬼灯の言葉を否定できなかった。

(隙を、隙を見て、どうにか脱出を……ソウリン様、どうかご無事で……)

「まずは、そのおっぱいから遊んであげるわ」

そう言いながら鬼灯がドウセツの大きな胸を鷲掴みにする。感度が異常なほど跳ね上がっているドウセツにとってそれは耐え切れないほどの快感だった。ただ、鷲掴みにされただけにもかかわらず……。

「ふああつ!!!」

よだれをたらしながら体をびくびくと震わせるドウセツ。

そんなドウセツには遠慮なく鬼灯は胸を何度もみ続ける。

その度にびくびく震え、台の上に水溜りを広げていくドウセツ。

そして、鬼灯は止めと言わんばかりにドウセツの乳首をつまみあげる。その瞬間、ドウセツの頭は完全にフリーズしてしまう。

「ひやああああん!!!」

ぷしやあああ!!!

ドウセツの胸から白い液体が噴出す。

おそらく、新しくインストールされたプログラムのせいだろう。

しばらく痙攣をしながら母乳のような液体を撒き散らしたドウセツは息を上げながら鬼灯をにらむ。

「あらあら、こわいわね、よだれをたらしているせいで迫力不足だけど」
何も言い返せず、ドウセツはただただ鬼灯をにらみ続ける。

しかし、鬼灯は気にする気配を見せない。

「そろそろこっちもいじろうかしら？」

そう言いながらドウセツの腕をロープで縛ると、天井につるし、無理やりM字開脚で座らせる。

「ぐっ……」

ドウセツは涙で潤んだ目で鬼灯をにらむことしか出来ない。

露出され、すっかり乳首が勃起した胸をさらし、涙目でにらむその姿はむしろ

鬼灯を興奮させる。

「じゃあ、まずはこれを脱ぎましょう？」

短パンを脱がされ、黒いパンツが露出されてしまうドウセツ。

「あらあら、ずいぶん色っぽいのははいてるのね。本当はこういうことすきなんじゃないのかしら？」

「そ、そんなわけ！」

顔を赤くして否定するドウセツ。

そんなドウセツに鬼灯は微笑みかけた。

「それじゃあ、そろそろ壊れてもらおうかしら？」

「っ……」

すでにパンツはびしょびしょになっており、ドウセツの割れ目の形がくつきりと浮き上がっている。

鬼灯はそこを指で軽くなぞった。

「ひゃあん！！」

たったそれだけで、ドウセツは数回分の絶頂を迎え、まるでおもらしをしたかのように潮を吹く。

止まっていたはずの母乳さえもまた、少しずつ漏れ始めている。

「うふふ、面白いわね」

「ひゃ、あああ……」

もはや言葉もまともに発することが出来ないドウセツ。

鬼灯はそんなドウセツのクリトリスをパンツの上から探り当て、それをつまむ。

「あつ、ひいいっ！！」

ぷしゅうう！！ぷしやあああ！！！！

よだれを、母乳を、おしっこを、愛液を撒き散らせながらびくびくのけぞる。もう、何かを考える余裕も残っていない彼女に鬼灯は止めを刺しにかかる。

「いじられただけでそんななら、これを入れられたら、どうなるのかしら？」

取り出したのは太く、硬い、バイブ。

しかし、ドウセツの目にはもうそれは映らない。

「あら、つまらない。じゃあ……さようなら、豊後のカラクリさん」

鬼灯はドウセツのパンツをずらすとバイブを思い切り突き刺す。

「いぎっ！！？」

それだけで、震え上がったドウセツには目もくれず、バイブの電源を入れる。ブブブブブ！！！！

「うあつ、あああああつ！！！！ ひゃあううう！！！！」

ドウセツは狂ったように叫ぶが、両手足の電源が入っていないため、何の抵抗も取れない。股間からはおしっこや愛液が撒き散る。胸からは当たり前のように母乳が噴出す。それでもバイブは振動を止めない。

「ひあつ、ああ……あ……」

しばらくするとドウセツの動きは少しずつ小さくなっていき、声もどんどん聞こえなくなっていく。そして、それから10分が経過した頃。

「……」

ドウセツは完全に沈黙をする。

おそらくエネルギーが尽きたのだろう。

「うふふ、面白い玩具ね。カシン様をお願いして私がもらっちゃおうかしら？」
力尽きたドウセツを見ながらそう呟く鬼灯。

ドウセツが強く麗しい乙女に戻ることが出来る日は、おそらく、もう来ないだろう。



後書き

■アイモ

ここまで読んでいただきありがとうございました！

まだまだ心残りがある内容となってしまいました・・・できれば続きを描ければと思います。

未だ勉強不足というところもあり物足りない部分も多いかと思いますが、今後も手にとって成長を見守っていただけたらなと思います。

描きながらカシンちゃん使えば割となんでも描けるというか描いてみたくなったので次回あたりはモトナリさんやヒデヨシを襲わせたいなどふつふつとイメージを浮かばせております。

まだ未定ですが、次回コミケ参加したときはさらに良い作品を読んでもらえるよう日々精進していきますでは！

■クロ

今回もゲストで書かせていただきました。

短い文章になってしまいましたが楽しんでいただけると嬉しいです。



奥付

南蛮の玩具屋

発効日：8月13日

発行：虎猫亭/アイモ

連絡先：aimo1214@gold.megaegg.ne.jp

pixiv ID：<http://pixiv.me/aimo1214>

印刷：日光企画

■十八歳未満の閲覧・所持は法律で禁止されております。

■画像の転載、web上でのデータ共有・無断のデータ販売

・複製、同人誌UPブログ等への転載はお止めください。

